

# 細見綾子の俳句形成期

——平等な人間観の由来——

市村 栄理

## はじめに

大正デモクラシーの自由な気風をうけて、女流俳人を育てようと、高濱虚子が主宰誌「ホトトギス」に婦人欄を設けたことが、大正の女流俳壇興隆に繋がったということは俳句史では定説となっている<sup>①</sup>。しかし、文学界の自由主義に憧れながらも、女流俳人の現実には家庭に縛られ、身近な生活を詠む台所俳句が主流であった。虚子の撒いた種が、大きく開花するのは昭和初期である。虚子の次女の星野立子が女流のためには「玉藻」を創刊、同じく虚子門の中村汀女は転勤の多い夫の赴任先で伸びやかな俳句を詠み、頭角を現す。更に山

口誓子門の橋本多佳子、原石鼎門の三橋鷹女が個性的な俳句を発表し活躍する。四人の頭文字から「四丁女流時代」と言われるのが昭和初期の女流俳壇である。

本稿で論ずる細見綾子は四丁が活躍する時代の中で俳句と出会い、太平洋戦争後、大きく開花した俳人である。俳句史では、四丁の次の世代の女流俳人と位置付けられる。

細見綾子は明治四十年に、兵庫県芦田村素封家の長女として生まれ、女性に学問は不要と言われる時代に十六歳で日本女子大学校（以下女子大と略す。）に入学。卒業後結婚をするのが結婚後二年で夫と死別してしまう。その後昭和四年末に正岡子規門の俳人松瀬青々に師事し、俳句を始める。それから十三年後、昭和十七年に第一句集『桃は八重』を上梓。戦

後二十一年には俳誌「風」を創刊するのに参加、二十七年に第二句集『冬薔薇』で第二回茅舎賞、五十年に第五句集『伎藝天』で芸術選奨文部大臣賞、五十四年第六句集『曼陀羅』で、俳壇最高の賞である蛇笏賞を受賞している。

平成九年に九十歳で亡くなるまで作句活動は衰えず、戦後再婚した、夫の沢木欣一と共に昭和・平成の俳壇を牽引してきた功績は大きい。また俳句や随筆は現代でも新鮮で、多くの人に愛されている。

綾子の句風には故郷丹波の風土を強く感じさせるものが生涯貫かれており、山本健吉氏は、初期の秀作「そら豆はまことに青き味したり」を取り上げ、「その後数十年の句業を思ってみても、そのよさの一切はすでに含まれ(略)噛みしめながら、その青さのもつまことの味を、自分に確かめ、納得させている行住座臥<sup>②</sup>」の志向が第一句集『桃は八重』に既にあり、と初学の頃からの完成度の高さを指摘している。

その俳句を始めるに至った文学的環境については、本人の自註や聞き書きをそのまま引用している論考がほとんどである。しかし、実は俳句以前に文学的環境があったこと、俳句初学のころは女子大学時代の人間関係が深く関わっていたこととは指摘されていない。また、沢木欣一と再婚し、長男誕生

後の「白木權嬰兒も空を見ることあり」「露の葉に蟻ゐるとも子の歳月」といった吾子俳句が愛唱され、綾子の母性や穏やかな人柄を基に綾子俳句を論ずる場合が多い。だが戦後、民主主義が始動した頃に、俳壇での女性蔑視の男性評論家の発言に対しいち早く反論したのも綾子であり、中村草田男に「男まさりの女」と言われたことも今では忘れられている。

本稿は、今まで殆ど注目されていない女子大時代と卒業後を中心に、その後の女流俳壇を牽引する姿勢に影響を与えた交友関係に焦点を当て綾子俳句の形成期について考察を試みたい。

### 「男まさりの女」綾子

門人の方がたの話では、綾子の穏やかな風貌や話し方や人間性を言う。確かにその通りだったのだろう。代表句「ふだん着でふだんの心桃の花」のような人格と想像される。しかし鍵和田柚子氏は綾子に少女時代のことを尋ねた時に「新しい目覚めたインテリだったのですよ。文学少女<sup>③</sup>」と言われ、「目覚めた知識階級」であることを直感したという。一見穏やかに見えるが、芯が強く、女流俳人を牽引していった俳人

である事を示す中村草田男の文が、綾子の第二句集『冬薔薇』（昭和27年8月刊）序にある。

神田秀夫氏だつたかと思うが、ある誌上で俳壇の所謂才媛作家が男性の模倣をこととして、薄つぺらな理智を弄し、血肉を喪失して居る実状を難じた揚句に言葉余つて、「女性は男性に劣るまいなどと望む必要はない。女性は只管女性らしくありさへすればいい」と言ひ切つた時に、先づ最先に抗議して立つたのが細見さんであつたことは、（略）実に愉快であつた。（略）「男まさりの女」の語に当る。

人間洞察に優れ、時代に先駆けてフェミニズムの精神のある草田男らしい綾子観だ。その当時一般に「女らしい」という語は、「無理智、没個性、受動的」と捉えられていて、綾子はそういう一般の女性とは遠い次元の「男まさりの女」であるというのである。「男まさりの女」とは草田男の賛美の言葉である。

そもそもこの論争の発端は平畑静塔が女流俳人を鼓舞し、男性社会の俳壇に押し上げようとしたことにある。綾子と加藤知世子、橋本多佳子の俳句を挙げ以下のように言う。

此等の女流俳人は、次代を儼ふ人々であるが、未だ強さ

を欠く。女流が女性らしく詠へばいいと云ふのは大きな誤りである。女流俳人は須らく男々しくあつてこそ文藝の第一線に立ち得るものである。（略）女が女らしい句を作つてゐては、第一流作家にはなり得ないのである。

「俳誌抄録」

次代を担う女流俳人に、男々しく俳句に向かい一流になれという。また「俳句は男、短歌は女」という論に対しても次のように主張。

（その説は）俗論であり、寧ろ女性のリアリズムはある意味で吾々をたじくとさせるものがあり、これはむしろ短歌的情熱でなく対象に向ひ直接進み、これをえぐり取るといふ俳句的リアリズムだ。（略）私の學校の極く初心者には時々驚くべき俳句的把握を見せるものがある。

「俳句と短歌について」

勤務先の大阪女子医専での俳句指導の経験から、俳句的把握に優秀な女学生の存在を述べる。この論に対し神田秀夫が反論する。

静塔氏は「女性は須らく男々しく」あれ、「女性のリアリズム」を持ってといはれる。併し、かういつたとて女性に通じる筈がない。「男々しく」と言つたつて、どんな

事だか、分かる筈がない。(略) 現在は文藝會と雖も、男が支配してゐる。女流俳人も、その枠にはめられて、いいとか悪いとか言はれてゐる。「須らく男々しく」あれなどといふのは、その典型的なものである。(略) 汀女と立子は虚子が指導した。汀女は勉強する。立子は娘だから勉強しない。勉強した汀女の秀才型の句は伸びない。勉強しない立子の句は伸び／＼してゐる。(略) 男の指導、畢竟何するものぞ。汀女といふ「男らしい」女流俳人を作つてしまつた。犠牲である。

「平畑静塔氏の女流俳人観に就て」<sup>⑥</sup>

この論争当時は、神田秀夫のような女流俳人観が一般的だつたであろう。静塔は医専で高等教育を受ける女学生に俳句指導をする実感で、俳句的把握には男女関係なく、俳壇の舞台に女流俳人を載せるために「男々しくあれ」と激励する。しかし神田は女性に「男々しく」は無理があると言い、さらに、勉強した汀女より、勉強をしない立子の方が、のびやかな俳句を作れるという極論に発展してしまふ。綾子はそこを厳しく反論する。

神田秀夫氏が「天浪」<sup>マヤ</sup>所載、平畑静塔氏の「女流俳人は須らく男々しくあつてこそ文藝の第一線に立ち得るもの

である」といふ言に對し、「こつ言つたとて女性には分る筈が無い、『男々しく』といふやうな言葉が女性に通ずる筈が無い」と言はれてゐるのを見て私は少からず驚いた。女性といふものが何と別物に考へられてゐるかに。女性は無論男性とは違ふのだが、又非常に違はないものだと思ふ。ちがわぬもの、上に立つて行かなければ、(略) いつまでたつても、ほんとうの違ひさになど到達出来はしない。(略) 男々しいといふことは、どこまでも態度の事だ。女も人間完成への道として男々しくなければならぬ。人間生長への努力なしに俳句だけが、うまくなるといふやうな事は絶対にない(略) 女も自分の個々を育て、行くだらう。そうしたら「女性俳句は」といふ、十把一とからげな言ひ方が、大路を通らなくなるだらう。少くとも、女性俳句が子供俳句と同じ、ひびきを持たなくなるだらう。(略) 勉強した汀女氏より、勉強しなかつた立子氏の句の方が伸び／＼してゐてよい、前者は男らしく勉強した犠牲だ、と同じく神田氏の言である。それでは勉強しない方がよいことになる。(略) やはり一にも二にも勉強だと思ふ。よく見たり考へたり、そして生きて行つたりする勉強で無ければ。

「女流俳人觀を讀みて」<sup>7)</sup>

綾子は男も女も大して違わない存在であること、「人間完成」のためには「努力」が不可欠であることを言うのである。

この論争では、静塔や神田が「男」「女」という範疇で論ずるのに対し、綾子は男女を越えた「人間」という上の視点に立って反論していることが注目される。女性も「人間完成」の道を歩むために「人間生長への努力」をすべきで、「人間生長」あつてこそ俳句が上達するという。そのためには「勉強」が重要と主張する。この現代にも通じる「男」「女」を越えた「人間」という考え方はどこから来ているのか。戦後すぐの女性蔑視社会の中で、綾子のいう「人間」としてという平等な視点がどこで培われたのか以下探っていく。

### 日本女子大と「目白文學」

綾子が俳句を始めるまでの経歴を少々記す。

昭和二年、女子大卒業と同時に東京大学医学部助手の太田庄一と結婚。母を本郷に呼び寄せ、綾子は女子大の図書館に勤務。しかし四年一月に庄一が病没してしまう。丹波に戻るが、四月に母も亡くなる。失意の中、綾子も肋膜炎を患い、

療養生活となる。その治療に当る医師の田村青齋が「倦鳥」主宰の松瀬青々の門人で、俳句を綾子に勧めた。四年末には「倦鳥」へ投句を開始する。

また、俳句開始前の綾子の文学環境を示す記事として、管見で最も古いものは「俳句」創刊三号（昭和27年10月）所収「私の俳句的生ひたち・女流諸家」の綾子の項である。句作動機の間「病氣をしていて、その時の醫師が俳人であつたので、すゝめられたのが直接の動機ですが、詩歌・俳句に、いつも關心をもつてゐたからでせう。」とある。俳句を勧められる前に、「詩歌・俳句」に關心を持つ環境にあつたことが書かれている。更に後年の回想では、大学時代には短歌の授業を受け「短歌の影響は相当受けたと思う。短歌も少しは作っていた。」（「初心どころ」<sup>8)</sup>）とある。そこで俳句実作以前に「詩歌」「短歌」への關心を示す資料を以下に示そう。

まず綾子の卒業した女子大学国文学部の「目白文學」第二号（大正15年12月）に四年生の編輯委員として綾子の名前が載る。次に卒業後第八号（昭和4年12月）に短歌九首<sup>9)</sup>を発表していることが挙げられる。さらに、第九号（昭和5年7月）に俳句五句、十一号（昭和6年12月）に俳句七句を寄稿している。

「目白文學」は、大正十五年三月に国文学部の学生が教授や教師の協力を得て創刊した同人誌であった。「目白文學」創刊号の「發刊の辭」には次のようにある。

私どもは生きて居ります。明らかな叡智と豊かな情緒と強い意志とに恵まれた「人」として生きてをります。

生きるとは表現であります。人として眞實に生きようとする私どもは(略)自由な生命の如實な表現を求めてやまないであります。(略)新しい國文學の創作と鑑賞と批評、(の場として)(略)國文學部の機關雜誌を持ちたいといふ事は(略)私どもの痛切な願ひでありました。(略)これによつて聊かでも、人間として、國民として、女性としての私どもの内的要求を充たし、やがて現代の文化的希望に應へ、我が女性と民衆との精神的燈明にまで育て上げたい祈願に燃えて居ります。

「人として」という言葉が重出するが、女子大の創立者成瀬仁蔵の建学の精神「女子を人として婦人として國民として育成する」という理想概念に則り、これを基に自由表現の場を作るといふ希望に燃えた發刊と分かる。

ここで少し成瀬仁蔵の目指した女子教育について付け加える。中寫邦氏によると「女子を人として婦人として國民とし

て育成する、と(成瀬は)主張している。人としての教育ははじめにおかれていることについて当時の他の講演でこの順序を違えてはならないと明言している。当時は「人」といえば男子を指し、女子は「子ども」と子どもと共に未熟なものとして捉えている。そのような女性の認識ではなく、男子と同様に女子も人として教育することが目標とされているのである。その基本の上に、婦人として、さらに國民としての教育がおかれる。」という<sup>⑩</sup>。つまり女性は男性より劣る性ではなく、同等の教育を受け、人間として成長することが良き社会に繋がるといふ理想・理念が建学の精神である。この理念をまとめた成瀬仁蔵著『新時代の教育』(大正三年刊)は「大正デモクラシー教育の指針となる著として評価され(略)(女子大は)自学自習の態勢をつよめた。」とある<sup>⑪</sup>。綾子が女子大に入學した大正十二年は、まだ僅かながら大正デモクラシーの残っていた時代だ。創立者の成瀬仁蔵は大正八年に亡くなるが、息のかかった教師や学生がおり、建学の精神が引き継がれていた。女子教育のために建学の精神を實踐する「実践倫理」といふ成瀬理念の講義を麻生正蔵第二代校長が継承、綾子も含め全學生受講した。前述した綾子の「女流俳人觀を讀みて」にあった女性を「人として」扱ふこと、

「女子ども」のように女性を無学で未熟なものとせず、「女性俳句を子供俳句と同じ」にしないという主張は、この建学の精神に明らかに通底している。

さて建学の精神で創刊される「目白文學」創刊号の内容を見ていくと、顧問の教師渡邊英一の論考を始めとして久保せい子の二葉亭四迷論、荻田アサノの小説、山原鶴（つる）、津田美津の短歌、佐々木耶奈の戯曲など十七編の作品が寄せられている。初代委員の津田美津（のち「女人短歌」創刊の長澤美津）は創刊の経緯を次のように述べる。<sup>12</sup>

研究グループがありまして純理論派と実作派、また理論と実作を並行させる演技派という三派にわかれていました。荻田アサノはロシア文学から、思想的に当時の運動に入りました。久保せい子は非常に論もたつて、啄木ばりの歌も作りましたが、卒業後早く亡くなりました。後に民主新聞に行った佐々木耶奈は、劇に心酔し話をしていと面白くて、時間がたつのを忘れました。その人達は後で、全部思想犯として引っぱられました。荻田アサノは早稲田大学ロシア文学科に学び、卒業後ロシアに行き、社会主義の運動をし、戦後は共産党の代議士になりました。私は短歌グループで実作を続けました。四年生

の時、この人達で、「目白文學」を創刊しようと言いつつ、「早稲田文學」の向こうを張るといふ意気込みだったわけです。そしてともかく「目白文學」一号を出しました。

国文学科でのグループ活動が基となり、津田美津、荻田アサノ、久保せい子、佐々木耶奈の四人が意気投合。教授陣・指導者そして卒業生等を巻き込んで、文学研究の自由発表の場を興した若い勢いのある同人誌であったようだ。更に津田を除くほかの三人は社会主義思想に傾いており、当時かなり新進的な色合いがあったことも分かる。

この中で特に綾子に影響があった人物は荻田アサノと山原鶴である。荻田は、綾子と同じ桂華寮生で綾子の一級先輩だ。「荻田アサノが（共産党に）入党する前に、鶴や弘津千代たち国文OBに呼びかけて創刊した文学同人誌目白文學<sup>13</sup>」ともあるから「目白文學」創刊の中心人物と分かる。さらに卒業後第三号から編輯に再度携わっている。<sup>14</sup>

山原は女子大國文科を大正十一年に卒業、直後に桂華寮の寮監と荻田等二十三回生の学業と生活指導をする教員に就任。「規約」によると教授陣と学生の間立ち編集事務を統一する「常任幹事」を担っている。綾子は、山原が寮監を務める

桂華寮生のため、その強い繋がりで二人に推され四年次には編輯委員となり、手足となって働いたに違いない。綾子が図書館勤務してからもこの二人との繋がりがあったと思われる。またその人脈は綾子が夫と母を亡くし丹波に戻ってからも続き、昭和四年「目白文學」八号に短歌を発表することになる。

## 短歌の発表

### 草枯時

秋さびし柿のみぢに鴟が来てひねもす遂ひに離れてゆかず。

しぐる、になほも鳴くなる鴟の聲何かはげしくひゞかひにけり。

葉鶏頭もゆるあかさに向ひみてひしくと身の弱りを思ふ。

この家に父母のなしわが一人命こもらうことさひし<sup>（イ）</sup>さ。父母とつひの別れのこの家に吾もまた病みである月日かな。

手にもてる煎じ薬の黒き色病癒すべく吾ものむかや。

生きて居れば生きて居る事に従ひて今日も薬を飲むが悲

しき。

云ひ出つるは堪えがたからむ眼をとちて今日も静にねるべかりけり。

眼をとちてたゞねむらむかしかすがにせまれる心たもちかねたる。

「目白文學」第八号に発表した短歌九首である。相次いで愛する人を亡くした孤独の絶唱だ。一首目・四首目に「さびし」、七首目「悲しき」と感情の直接的表現があり自身の境遇への心細さが浮彫りになる。

「草枯時」の全体を見ると、一首ずつの完成度よりも作品群全体の構成功の良さを感じる。一・二首目「柿紅葉」の明るい庭で頻りに叫ぶ「鴟」は己の分身のよう。三首目「葉鶏頭」の紅色に対峙し却って身の衰えを自覚する。四・五首目「父母なき家」での孤独。六・七首目「薬」に頼るしかない臆な存在。八・九首目「眼をとちて」横たわるだけの境涯という配列は巧みだ。療養する自分の部屋から見えるほの明るい庭に守られつつ、細々と命をつなく綾子の孤独がこの構成で一日の映像として切々と伝わるのである。

綾子の俳句には、主観語の多用がよく指摘される。「倦鳥」の初入選句「野の花にまじるさびしき吾亦紅」や後年の

「桜咲きらんまんとしてさびしかる」等である。これは創作が短歌から始まったことが起因しているよう。

また、綾子の女子大時代の短歌の興味の傾向は前出の「初心のころ」<sup>⑤</sup>にある。

私が選択課題目とった短歌の時間の先生は茅野雅子さんで与謝野晶子の弟子で、いつでも晶子の歌をよく引用した。私は晶子の歌は才気煥発ではあるが、一度読めばそれでもいいようなところがあり、むしろ吉井勇の歌の方がおもしろかった。私は古泉千樫を愛読した。

吉井勇は寮監の山原が習う歌の師、古泉千樫は「目白文學」創刊メンバーの津田の師である。津田は昭和四年に歌集『汜青』を出版、歌人として歩み出している。綾子の短歌創作の興味は授業よりも、「目白文學」の身近な存在からの影響が大きかったと分かる。

昭和二十四年十月の「風」のアンケート<sup>⑥</sup>に、俳句を作るようになった理由を聞く問があり、綾子の答えは「ずっと前のことですが、失意の時、表現慾に駆立てられ作るようになりました。」であった。「失意」とは相次ぐ身内の死であり、そこから「表現慾」が湧いたという。どん底の嘆きをそのままに終わらせず、「草枯時」を発表したことは綾子にとって大

きな一歩だったと言える。また失意より這い出す「表現慾」の実践の最初が俳句ではなく短歌の創作だったこと、発表の場が「目白文學」であった事は、大変意義深い。女子大卒業後も文学で繋がっていきける仲間との環境があったのだ。それは鍵和田が聞いた「新しく目覚めたインテリ」としての綾子の気概を受け容れる器として働いたのではないだろうか。

短歌によって始まった綾子の創作活動が、昭和五年からは「倦鳥」の投句と併行し、「目白文學」でも俳句寄稿へと移行していく。自然の中で、無心に対象に観入する俳句は綾子の身心を穏やかにするのに役立っただろう。ここに綾子の「表現慾」は益々高まり俳句への一途の道となっていくのである。

### 綾子の短歌の句読点について

綾子の短歌「草枯時」について少々付け加える。綾子の短歌の結句には全て句点がついていた。このことはいかなる意味があるのだろうか。

短歌において句読点が現れたのは、和歌の世界を抜け変化するしようとした明治期である。短歌の韻律を活字作品として目に見える形で表現しようとする際、意味の切れ目の他に歌の

韻律を示そうとするのに、句読点が行分けと同じ役割を果たしていくのである。短歌の句読点については、高橋良雄氏が「近代短歌における行分けと句読点」<sup>①</sup>「短歌における句読点と口語」の一連の論考によつて発生から推移まで詳しく論じている。その論考の中で、「目白文學」と関係があるとすれば、同時代（大正末から昭和初期）の釈空の句読点であろう。

また、綾子は随筆の中で「私は若い時から折口先生の歌の愛読者であった。（略）自分は俳句の中で折口先生のやうなものを求めてゐた。」<sup>②</sup>とあり、釈空（折口信夫）を敬愛していたことも分かる。

釈空は、大正十四年の歌集『海やまのあひだ』の後書きの「この集のすゑに」において句読点の重要性を説いている。「句読法」による「自身の呼吸や、思想の休止点を示す必要」<sup>③</sup>性を強調、句読点を積極的に使い、短歌の韻律を自由にする可能性を詳しく述べている。前掲の高橋氏の論考にも、「釈空の短歌の句読点は、文字に表される文学としての短歌においては、当然とらなければならぬ形式であり、それは歌の意味を明らかにする上からも、歌における自身の呼吸や、思想を示す上からも必要なことあり、（略）内在して居る拍子を示すものとして重要な役割を持つものである」という

指摘がある<sup>④</sup>。

例えば『海やまのあひだ』冒頭の歌について私見を述べるならば、

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。

この山道を行きし人あり

「踏みしだかれて、」の読点により葛の花の発見した驚きの息遣いが感じられる。次に「色あたらし」の句点によつて、休止の効果が、花への作者の鮮烈な感動が読者に伝わる。

最後に一転して、「この山道を行きし人」への思いが深くなり、自身の旅の孤独に加え、先に踏み行った人の孤独まで思いを馳せる作者の心的過程が伝わるのである。句読点の付与によつて、作者の意図、呼吸、思想が正確に伝わる効果が認められると言つてよいだろう。

では「目白文學」綾子の短歌の句読点はいかなる意義があるのだろうか。

実は、「目白文學」創刊号では、短歌を寄稿した山原・津田・内山ちとせ・鹽谷やすよ等の結句は一律全員に句点が付いている。しかし、第二号にも寄稿した津田、鹽谷の結句は句点がなく、内山は、最後の「歌だけ句点が付く。つまり、同じ作者の結句の句点が、付く時と付かない時とがあるが、

それが号毎に統一されているのが分かる。

また綾子が寄稿した第八号（昭和四年・十二月刊）では、綾子の他に、茅野雅子、山原、鹽谷などの短歌にも全て結句に句点が付いているにも関わらず、第九号（昭和五年七月刊）では、茅野、長澤（旧姓津田）の短歌は句点が付いていない。しかし、小原優子の歌には「かんばしく春の光は迫り来ぬ、山より野より吾れの心に」など、句点はないが、上の句に読点が付いている。

一号の違いで、同じ作者で句点が付いたり付かなかつたりと言うのは、寄稿者の意思ではないのではないか。むしろ編集部意向なのではないか。つまり、卒業に伴って毎年少しずつ編集委員が交代するのが大学同人誌の性質であるため、編集方針が号毎に変わるのではないだろうか。その結果、句点にも編集方針が表れていると考えざるをえない。さらに、これらの結句の句点は、逍空のように短歌の意味・呼吸・思想への効果を狙ったものとは考えにくい。むしろ一つ一つの歌の独立性を示すために付けられているように見える。

しかし、前述のとおり、「目白文學」の編集部には、文壇や歌壇に敏感な委員が何人もいる。それを考慮すると「目白文學」の短歌に句読点を付与することは、深く韻律への効果

を狙うとまで言えないまでも、歌壇の風潮には敏感であることを示す表れだったとは言えないだろうか。

この件については更に調査が必要であり、綾子俳句への逍空の短歌の影響についてとともに今後の課題としておきたい。

### ファシズムに飲み込まれる「目白文學」

綾子が短歌や俳句を寄稿し始めた昭和初期の日本は文学界を震撼させる事件が次々と起こり、それが「目白文學」も飲み込んでいく。

大正十二年に関東大震災が起きて以来、日本は大不況に陥り、あちこちで労働問題が起きる。十四年には治安維持法公布。昭和三年には、三・一五事件が起き、政府が自由主義・社会主義など国民の自由な思想を弾圧しつつ大陸へ侵略する機会を窺う時代となる。四年には文部省の教化総動員計画で学生への思想教化が始まる。五年には高等教育の指導者にも統制協力が要請され、翌年女子大初の女性校長となる井上秀子も吉岡弥生、山脇房子と共に「大日本連合婦人会」の理事に就任している<sup>21</sup>。六年九月に満州事変、八年にはプロレタリア文学者の小林多喜二が拷問死するのである。

自由な発想・発言を尊重した女子大も言論統制の時代の波に飲み込まれていく。「目白文學」創刊時には許されていたロシア文学、プロレタリア文学論は、綾子が二度目に「俳句」を寄稿した昭和六年の十一号でも続けられていた。荻田の評論「村の點景」その他<sup>②</sup>や松下米子のソビエトの『五ヶ年計畫の話』をよむ<sup>③</sup>等、左翼的な内容も掲載されている。「編輯後記」に、学校側から何か規制があった様子が少々見えるが次号の原稿と誌友の募集は続いている。しかしこの号を最後に「目白文學」は発禁となってしまった<sup>④</sup>。その経緯は三十年後の昭和三十六年に第二次「目白文學」が復刊した際、山原の言で明らかにする。

検定が出来まして、自由な授業も出来ないし、論文にも規定され、(略)最後の頃は、学生運動が盛んになりまして、学校で「目白文學」が左翼的なものになることを心配して一応やめようということになりました。(略)

当時の学生は学校から非常に叩かれていましたから。教育界への政府の検定が女子大に及び、左翼傾向の「目白文學」を恐れ発禁処分とされたのだった。

実際、昭和七年には山原も社会主義の関心をもつ寮生を庇った疑いで特高に尋問され、大学を辞任する<sup>⑤</sup>。また八年には

共産黨員として活動を続けていた荻田も検挙される。

この十一号で何が起きているか、編集部に近い存在であった綾子は当然読んで理解していただろう。むしろ丹波という遠い地でありながらも「目白文學」を応援するために投稿し続けていたのだと私は考える。

### 湯浅芳子との出会い

綾子の文芸活動に影響を与えた人物として、ロシア文学者であり翻訳者である湯浅芳子を挙げたい。湯浅はプロレタリア文学の宮本百合子と女性同士の恋愛関係にあり、二人でソビエトに留学をした人物である。上野さち子氏は綾子の青春時代を「ロシア文学の湯浅芳子とも親しく交わり、新たに台頭して来たプロレタリア文学にも関心を示すなど、柔軟で幅広い好奇心」を持ったと指摘しているが、湯浅との具体的な交流内容、影響については述べていない。しかし、前掲の昭和二十四年の「風」のアンケートに綾子は愛読書として、昭和九年に湯浅が翻訳したゴースキー『幼年時代』を挙げ、好きな文学者として「樋口一葉」と湯浅と関係のあった「宮本百合子」の名を記している。更に、昭和二十七年第二句集

『冬薔薇』で第二回茅舎賞を受賞した際の祝賀会の写真には湯浅が綾子の隣に立っており、二人の交流の深さが分かる。

綾子と湯浅の会話は、山原からの紹介によってである。<sup>77</sup>

山原と湯浅は共に女流作家田村俊子のファンで、大正七年俊子が渡米する直前に出会って以来交流が続き、山原が寮監になってからも寮に顔を出していた。荻田は大正十五年からロシア語を湯浅から習っている。<sup>78</sup>そのため桂華寮生の綾子も湯浅と面識があった。

綾子と芳子の交流はどのようなものだったのか。綾子著『私の歳時記』<sup>79</sup>の「晩秋」の項に手掛かりがある。昭和十八年十月に「寒雷」の加藤楸邨が沢木の出征送別会を大洗で催し、綾子は出席する。沢木の出征を見送った翌日に湯浅に雑司ヶ谷で会う。Y女史とは湯浅の事である。

彼（沢木）の残して行つたものがあたりに残つてゐた。

何であるか知らないけれども、黒く淋漓としたものが彼のおぬい私の空間を充たした。（略）翌日、ロシア文学者のY女史のところに行つた。（略）Yさんの大きな鋭い眼が私の顔をまともに見た。鋭いが、冷たくない、凡そこの世で私が信頼を置いてゐる眼である。「あんた恋愛をしてゐるんじゃない？」と言つた。

沢木との今生の別れを覚悟した綾子は複雑な心境を「黒い淋漓」と表現。心の高ぶりはまだ本人は恋愛と認識していないが、湯浅は鋭く見抜く。この場面は綾子と沢木が復員後に結婚を決める伏線となり、読者に深く残る名文であり、綾子の心境の微妙な変化に気づく湯浅との関係はかなり親しくなっていることが分かる。また、綾子にとって湯浅は「信頼をおいてゐる」関係なのである。昭和十八年と言えば綾子は三十六歳で芳子は四十七歳。綾子は夫を亡くし十四年目になり、前年には第一句集を出版、俳人として出発をしていた。また、湯浅は宮本百合子とは別れ、女子大退職後に茶道の師となつた山原の茶室松壽庵（雑司ヶ谷）に同居している<sup>80</sup>。綾子は未亡人として一人で生き、俳句を心の支えとしてきた時期である。湯浅のロシア文学者として自立して生きる強さに憧憬の念を抱いていたのではないだろうか。また、湯浅も綾子が一人で懸命に生きる姿を、「冷めたくない」温かく見つめていたことが、この文から読みとれる。

さらに、次の文が続く。

Yさんは私を待たせて又煙草を一本吸つた。このはげしい人、革命後のロシアを宮本百合子と共に見に行つた人、饑渴の美しさを私にいつでも感じさせて呉れた人、最も

人間らしく、それが美しいことだと思はせてくれるやうな人、私はYさんの煙草の煙りの流れるのを見てゐた。

湯浅は革命後のソビエトに宮本百合子と共に行き、社会主義の下では、女性と社会的に底辺の人々が「人間として生き易い」ことを見てきた人物である。実際ソビエトでの湯浅の生活は最後は大変貧乏だった上に、百合子との生活も女同士の恋愛にも限界を感じての帰国であった。しかしその困難の中でも湯浅はどうか翻訳の勉強を貫き自立、また自分は女でも男でもない「人間らしい」生き方を見つけて日本に戻ってくるのである。それはまさに「饑渴」の中で強い精神力によつて人間らしい生き方を獲得したと言える。その生き方を綾子は「饑渴の美しさ」と感じ、湯浅を男女を越えた「最も人間らしい人」と表現する。この言葉は綾子が湯浅を「人として」尊敬し、信頼していることを示していると言えよう。また、ここには現在にも通じる綾子の人間把握がある。現代でこそ人類は男と女という性別で分けられないことは分かっているが、綾子は湯浅から、人間は男女で分けて考えるより、それを超える「人間」という範囲で捉えるべきという考えに達しているのである。

さらに自由思想と共産主義への弾圧が強化される中でも湯

浅は着々とロシア文学の翻訳を続け、昭和九年ゴリキー作『幼年時代』、十五年シチエドリーン作『ゴロヴィリヨフ家の人々』、十七年にゴリキー作『人間の誕生』等を出版する。一方、昭和七年にプロレタリア文学の宮本顕治と結婚した百合子も何度も検挙され投獄されても思想は捨てなかつた。その文学に賭ける精神力を湯浅芳子から、また間接的ではあるが宮本百合子から不屈の精神を綾子は学び、それが俳句創作者としての覚悟へと繋がっていったのではないだろうか。綾子の俳句創作の面では、戦前・戦中は、社会主義的な表現が現れてはいないため検挙されることはなかつたが、身近にプロレタリア文学の作家達がいたことは、「態度」として生き方として大きな影響があつたことは否めない。それが戦後の昭和二十四年の「風」のアンケートに、愛読書として『幼年時代』、好きな文学者として「宮本百合子」とした理由であろう。

## 結論

再び女流俳人観の論争に戻ると、綾子の「人間完成」「人間生長」という語には、日本女子大の建学の精神の「人とし

て」の女性教育の理想・理念が影響していたことは否めない。しかし表面的な影響以上に、言語統制の時代でも、理想精神を貫こうとした「目白文学」の仲間の存在は深く考え方に影響していたのだった。さらに湯浅芳子からは男性・女性という範疇を越え「人として」「文学者」として生き貫く精神を学び、綾子の文学者としての自覚に繋がっていった。戦後民主主義が始動した時に、旧態然と女性蔑視の発言をした神田に猛反発したのは、「人間完成」には「努力」が不可欠なことは女性も男性も区別ないという綾子の平等な人間観からはかけ離れた発言だったからである。性別を超えた「人間らしさ」を大切にするこの姿勢は、文学者としての綾子の精神の礎である。

また、綾子が神田に反発した戦後の昭和二十四年の作品には次のような句がある。

麦秋や農婦胸より汗を出す

〔風〕昭24・7・8月合併号

縞蜂の飛び交ふ中の裸かな

〔風〕昭24・9

ト口押しに女もまじる山す、き

〔風〕昭24・11

これ等は戦後の貧しい生活の中で懸命に働く庶民の姿を描くことに挑戦している作品と言えるのではないか。ここには男女を越え、「人間」として強く生活する姿を応援する眼差しを読み取ることが出来る。

昭和二十八年頃から俳壇では盛んに社会性俳句が問題になるが、それよりも四年も早く労働者の姿を詠む意識は、女子大時代からプロレタリア文学に関わる人との交流があった影響からであろう。戦後に自由な言語活動が許され、社会的な対象も規制されず詠めるようになった中、封印されていた綾子の本来の思想が表出した作品と考えられる。まだ封建的な女流俳人観が残る中で、先進的な思想が青春時代から育まれていたからこそ戦後の女流俳人を牽引できたのだ。さらに綾子の作品が現代でも新鮮であるのは、時代を超えた人間把握があるからであると言えよう。

その先進的な考えを育んだプロレタリア文学の影響と綾子作品との関係は、今後さらに調査していきたいと考えている。

※執筆に当たり、中野沙恵氏、池田一彦氏、上野英二氏、坂口昌弘氏にご教示いただいた。深く感謝申し上げます。また、

御遺族の澤木くみ子様に深謝するとともに、資料閲覧、提供に協力いただいた成城大学図書館、日本女子大学図書館、俳句文学館に感謝したい。

※本稿は俳誌「秋麗」（令5・11）に掲載の論考「男まさらの女 細見綾子」にその後の調査で判明したことを加筆したものである。

## 注

- ① 平井照敏・鷺谷七菜子編『女流俳句の世界』（昭和54年8月刊 有斐閣）54～71頁
- ② 「細見綾子句抄」「俳句」昭和63年4月号 68頁
- ③ 「細見綾子論」「俳句」昭和53年8月号 65頁
- ④ 「天狼」昭和23年3月号 31頁
- ⑤ 注④と同書。26頁
- ⑥ 「風」昭和23年9月号 30～31頁
- ⑦ 「風」昭和24年2月号 22頁
- ⑧ 「俳句研究」昭和61年3月号 116頁
- ⑨ 青木生子・岩淵宏子編『日本女子大に学んだ文学者たち』（平成16年11月刊 翰林書房）215頁に「目白文学」第2号に綾子が編集委員として名が載ることのみ綾野道江氏の指摘があるが、第8号に初めて短歌を発表したことの言及はない。本稿が綾子の短歌発表について初の言及である。
- ⑩ 「國文目白」第四十一号 平成14年2月刊 10～11頁
- ⑪ 注⑩と同書。14頁
- ⑫ 注⑨と同書。200～201頁
- ⑬ 林えり子著『日本女子大桂華寮』（昭和63年2月刊 新潮社）202頁（以下「桂華寮」と略す）
- ⑭ 「目白文学」第三号 昭和2年6月刊 編輯後記
- ⑮ 注⑧と同書。116頁
- ⑯ 「風」昭和24年10月号「同人特集・作品及アンケート」12～13頁
- ⑰ 「學苑」（昭和女子大学 光葉会）昭和34年11月号、35年1月号、37年1月号
- ⑱ 細見綾子著『私の歳時記』（昭和34年8月刊 風発行所）167頁
- ⑲ 「折口信夫全集」第24巻（平成9年2月刊 中央公論社）123頁
- ⑳ 注⑰と同書。「短歌における句読点と口語」昭和37年1月 68・69頁
- ㉑ 千野陽一著『愛国・国防婦人運動展開の軌跡』（平成8年6月刊 日本図書センター）14頁
- ㉒ 注⑬と同書。「桂華寮」202頁
- ㉓ 「座談会「目白文学」を語る」「目白文学」創刊号（第二次） 昭和36年12月号 27～28頁
- ㉔ 注⑬と同書。「桂華寮」202頁、「日本女子大学学園事典」（平成13年12月刊 日本女子大学）325頁
- ㉕ 上野さち子著『女流俳句の世界』（平成元年10月刊 岩波新書）199頁
- ㉖ 「細見綾子アルバム」「俳句研究」昭和61年3月号 口絵
- ㉗ 堀古蝶著『細見綾子聞き書』（昭和61年1月刊 角川書店）17頁「寄宿舎の寮監が彼女（湯浅）を良く知っていた関係で、ときどき女史が大学に顔を出し、寮監の紹介で知己を

得ることが出来た。」とある。

②⑧ 注⑬と同書。「桂華寮」63～65頁、沢部仁美著『百合子、ダスヴィダーニヤ』（平成2年2月刊 文藝春秋）年譜303頁

②⑨ 注②⑧と同書。『百合子、ダスヴィダーニヤ』年譜 304頁  
注⑱と同書。43～44頁

③① 注②⑧と同書。『百合子、ダスヴィダーニヤ』年譜 307頁、昭和13年の項に「暮れから山原鶴の雑司が谷の松寿庵に同居」、19年に「軽井沢旧道に家移す。」とあるのでその間は同居していたと分かる。

③② 注②⑧と同書。『百合子、ダスヴィダーニヤ』第六章「モスクワの日々」～第七章「百合子との別れ」

※綾子の句集所収の俳句、序の表記は沢木太郎編『細見綾子全句集』（平成26年9月刊・角川文芸出版）に拠る。

#### その他参考文献

『年表 日本女子大学の100年』（平成13年12月刊 日本女子大学）

杉橋陽一著『剥落する青空―細見綾子論―』（平成13年8

月刊 白鳳社） 等

（いちむら・えり 成城大学非常勤講師）